

<麦類の栽培ポイント>

1 湿害対策

3月の気温、降水量ともにほぼ平年並みの予報が出ています。茎立ち期以降の湿害は、収量や品質の低下を招きます。季節はずれの大雨が降ることもあり、明渠の設置・溝さらいなどの排水対策をしっかりと行いましょう。

2 麦踏み

茎立ち期直前の麦踏みは、穂揃いを良くし、成熟ムラのない倒伏に強い麦にする効果があります。平年の茎立ち期は3月上中旬ですが、生育が順調に進んでいるため茎立ち期が早まる可能性が高いです。圃場の様子をよく確認した上で、茎立ち期まで積極的に麦踏みを行いましょう。10～14日間隔を空ければ次の麦踏みが行えます。

3 雑草防除

雑草は収穫作業の支障になるだけでなく、種子が収穫物に混入すると品質低下の原因にもなります。雑草が発生している圃場では、茎立ち期までに防除を実施しましょう。

雑草の生育が進んでいると、除草剤の効果が劣る場合があります。適切な時期に使用できるように、圃場を観察しましょう。

【防除農薬の例】

令和3年2月15日現在登録状況

農薬名	適用雑草名	使用時期・使用方法	使用回数
ハーモニー75DF水和剤	一年生広葉雑草 スズメノテッポウ	節間伸長前までに雑草茎葉散布、又は全面散布。 (但し、スズメノテッポウ5葉期までが散布適期)	1回
エコパートフロアブル	一年生広葉雑草	節間伸長開始期までに雑草茎葉散布、又は全面散布。 (小麦、大麦とも広葉雑草2～4葉期まで、小麦：ヤエムグラ2～6節期まで)但し、収穫45日前まで	2回以内
アクチノール乳剤	一年生広葉雑草	穂ばらみ期まで(雑草生育初期)に雑草茎葉散布、又は全面散布。	2回以内

※農薬はラベルの表示を確認して正しく使用してください。

4 赤かび病防除

赤かび病が発生すると出荷できなくなるので、必ず薬剤散布を行いましょう。

二条大麦 (ビール麦)	防除適期:穂揃い期 7～10日後 ポイント:登熟期間中に雨が nhiều 場合は、1回目の7～10日後に2回目の散布をしましょう。
はだか麦 (ビューファイバー)	防除適期:1回目・開花始め(おおむね出穂7日後)、2回目・1回目の10日後 ポイント:登熟期間中に雨が nhiều 場合は、3回目の散布を行いましょう。
小麦	防除適期:1回目・開花始め(おおむね出穂7日後)、2回目・1回目の20日後 ポイント:登熟期間中に雨が nhiều 場合は、3回目の散布を行いましょう。

【防除農薬の例】

令和3年2月15日現在登録状況

農薬名	二条大麦(ビューファイバーを含む)		小麦	
	使用時期	使用回数	使用時期	使用回数
シルバキュアフロアブル	収穫14日前まで	2回以内	収穫7日前まで	2回以内
チルト乳剤 25	収穫21日前まで	1回	収穫3日前まで (無人ヘリは収穫7日前まで)	3回以内
トップジンM水和剤	収穫30日前まで	3回以内 (出穂期以降1回以内)	収穫14日前まで	3回以内 (出穂期以降2回以内)
トリフミン水和剤	収穫14日前まで	3回以内	収穫14日前まで	3回以内

※トップジンM水和剤、シルバキュアフロアブル、チルト乳剤は、無人ヘリドローンによる散布が可能です。

※農薬はラベルの表示を確認して正しく使用してください。

※**「麦類無人ヘリ防除」・「麦類赤かび病防除薬剤」**の取りまとめが行われますので、
ご利用よろしくお願ひ致します。

(裏面あり)

<水稲病害虫防除のポイント>

1 いもち病について

令和2年産は天候の影響もあり、JA足利管内（全地区）でいもち病の発生が多く見られました。

いもち病は稲が出穂するまでの期間、菌が葉に感染して病斑を形成し、出穂期以降も穂首や籾などに感染します。感染すると収量・品質に多大な被害をもたらします。また、**曇天・少日照・やや低い気温**（25℃くらい）・**高湿度**などの条件で感染し易くなります。

感染リスクを最小限にするために箱施用剤を有効に活用しましょう。

【防除農薬の例】

令和3年2月15日現在登録状況

	農薬名	分類	希釈倍率、散布量	使用時期	使用回数
箱施用剤	防人箱粒剤	殺虫殺菌	育苗箱1箱当り50g	播種時(覆土前)～移植当日	1回
	ルーチンアドスピノ箱粒剤	//	育苗箱1箱当り50g	播種時(覆土前)～移植当日、又は播種前	1回
	フジワンプリンス粒剤	//	育苗箱1箱当り50g	緑化期(育苗後3～5日)～移植当日	1回
	ビームパディート箱粒剤	//	育苗箱1箱当り50g	移植3日前～移植当日	1回
	トリプルキック箱粒剤	//	育苗箱1箱当り50g	移植3日前～移植当日	1回

※農薬はラベルの表示を確認して正しく使用してください。

2 イネ縞葉枯病について

JA足利管内では縞葉枯病抵抗性品種であるとしぎの星、あさひの夢の作付けが多くなりましたが、**抵抗性のない早生品種（コシヒカリ、なすひかり）**の作付けをされている圃場は少なくありません。

縞葉枯病は体内に病原ウイルスを持ったヒメトビウンカなどが稲の茎から吸汁をした時に感染します。発病株は生育不良となり、葉は細くなり巻いたまま垂れ下がり枯れてしまいます（ゆうれい症状）。そして穂の出すくみ、不稔が発生し大きな減収につながることもあります。

縞葉枯病対策は発病後の治療はできません。ポイントは、**適切な箱施用剤の使用と本田防除の実施に加え、ヒメトビウンカの越冬場所をなくすこと**です。ウンカは再生稲（ひこばえ）やイネ科雑草に寄生して、翌年の水稲に感染を広げます。**水稲収穫後早めの耕起、圃場周辺の除草の徹底**などを心掛けましょう。

【防除農薬の例】

令和3年2月15日現在登録状況

	農薬名	分類	希釈倍率、散布量	使用時期	使用回数
箱施用剤	プリンス粒剤	殺虫	育苗箱1箱当り50g	播種時(覆土前)～移植当日 又は播種前土壌混和	1回
	フジワンプリンス粒剤	殺虫殺菌	育苗箱1箱当り50g	緑化期(育苗後3～5日)～移植当日	1回
	フェルテラチェス箱粒剤	殺虫	育苗箱1箱当り50g	播種時(覆土前)～移植当日	1回
本田	トレボン粒剤	//	2～3kg/10a	収穫21日前まで	3回以内
	トレボン乳剤	//	1000～2000倍 60～150リットル/10a	収穫14日前まで	3回以内

※農薬はラベルの表示を確認して正しく使用してください。